

第9回 国際協力セミナー 報告

開発援助の現場から： マラウイ、グアテマラからの活動報告

講師： 斎藤えりかさん 『HIV/AIDS Project In Malawi』

若尾健太郎さん 『豊かさの尺度』

日時： 2007 年 12 月 11 日(火)17:00～

場所： 柏キャンパス 環境棟7階講義室

参加者： 15 人

議事：

1. 『HIV/AIDS project In Malawi』

講師： 斎藤えりか（千葉大学法経学部総合政策学科 2 年間休学中）

マラウイ、NGO の HIV・AIDS プロジェクトでの活動報告

(1) Introduction

① なぜ HIV/AIDS に興味を持ったのか。

貧困の根本原因に興味があった。その一つが HIV/AIDS。

② なぜアフリカに行ったのか。

HIV/AIDS はアフリカだけの問題でないが、最も深刻なのはやはりアフリカ。

HIV/AIDS に感染している赤ちゃんを抱いたときに、自分の中にある偏見に気づいた。その問題を探ってみたいと感じた。

(2) タイムライン

① イギリス:7ヶ月

母体 NGO: Humana People to People(Humana)

系列学校: College for International Co-operation and Development(CICD)

② マラウイ:8 か月

(HIV/AIDS プロジェクトにて活動)

③ イギリス:2か月

(スコットランドにあるエコビレッジにてボランティア活動)

今日はマラウイの体験だけにしぼる。

(3) マラウイの基本情報

場所： アフリカ大陸の南東地方 活動場所はチラズル地方(Chiradzulu District)

面積： 11.8 万 Km²(九州と北海道を合わせた大きさ)

人口： 1260 万人

首都： リロングエ



公用語: 英語、チェワ語

通貨: クワチャ

宗教: キリスト教は半数、イスラム教、伝統宗教

マラウイのイメージ:

動物があちこちに居る? 熱い? 裸の生活? まずしい、食べ物が無い、自然がいっぱい...

実際は...

動物が居ない。虫が居る。カメレオンが居る。

マラウイの台地は、乾季は特に、緑が少なく、茶色い大地。緑に見えても作物。紅茶やとうもろこしのプランテーション。自然ではない。

寒い。焚き火に当たっている。7人亡くなるほど。

経済: 農業が生活の基盤。労働人口の85%が農業に従事する。他は自給自足。主な輸出品はたばこ、さとう、紅茶

季節: 5月~8月(乾季)寒い。9月~4月(雨季)熱い。

衣食住: 電気ガス水道は無し。井戸を利用。すきま風が入る家屋。モスクートネットも買うお金は無い。服もぼろぼろ。サンダルも無い。

主食はとうもろこし。家族総出で剥く。粉をこねて蒸す。バナナなどフルーツでつなぐ。たんぱく質源は虫。手で取れるものならば、何でも食べる。

マーケット: あるが、基本は自給自足。市場は充実。食べ物が無いのではなく、買えない。農薬が使われていない、色が鮮やか。

私の暮らし: 電気も水も無い。太陽と共に起きて、寝る。水浴び。トイレあり。モスクートネットあり。庭で野菜を育てる。日記、ギター。ガスが無いので、オイルを使ったコンロ。雨水を利用。石炭で一酸化炭素中毒に。

(4)活動

① 8ヶ月の活動カレンダー

11月~12月(イベントのためのパートナーシップ)

- ・ ワールドエイズデーの準備。
- ・ 孤児へお洋服をクリスマスプレゼントとして配布

1月~6月(ピーナッツバター企画)

- ・ ミーティング
- ・ ユースの劇やレクチャーの撮影
- ・ ドキュメント作り
- ・ HIV/AIDS についてのインタビュー記録
- ・ HIV/AIDS の劇撮影
- ・ ユースオリンピック大会
- ・ ユースによる病院清掃活動
- ・ 陽性者グループのインタビュー集め
- ・ 南アフリカに滞在
- ・ トレードフェアで販売
- ・ 市場開拓

最初の8ヶ月は何をしたらいいか分からなかった。

後半はニーズがつかめてきた。

もっと長期でいかなないとなかなか活動できない。

② マラウイの HIV/AIDS 状況

全人口: 1260万人のうち

HIV の感染数(15~49歳): 90万人 (内58%は女性)

HIV の感染率(15~49歳): 14.2%

1年で8万7千人の人がエイズで死亡 (死亡原因の70%がエイズ)

1年間で1万人の新規 HIV 陽性者が出る。このうち半数以上は若者。

* 数値はあくまで参考程度。

③ 活動内容

A. 予防・啓発

予防、啓発、ケア・サポートという三つの段階がある。

Youth Club(ユース・クラブ)が結成されている。



メンバーは感染しているかどうか分からない

- ・ WORLD AIDS DAY 12月1日のイベントの一つとして開催。
ユースによるカルチャーショーや歌、伝統ダンス、劇も。レッドリボン作り。
- ・ Youth Cleaning Hospital ユースによる病院清掃活動。社会貢献活動のきっかけとして。
- ・ Youth Olympic Game リスク行動(性交渉、麻薬など)からの回避のため。

すべて Youth が担当。自分は裏方。

自分たちでやりたい。お金が無いから支援してくれないか。

外部の人間が前に立って進めると言うことはしない。外部者は必ずリーダーを立てて、サブで入る。

私の主な働き:

ポスターやバーナーづくりなど準備、資金・物質調達、立案、企画、管理、運営など裏方中心。サポート的に入る。前に出るのは現地若者。

C.Y.O (Chiyanjano Youth Organization)

地域から発生したグループ。

当事者である若者が、「若者である自分たちが変わり、自分たちが引っ張っていけばマラウイを救える」という想いから。「その地域に住む若者が、その地域の人々のため」オフィス、ぼろぼろでも。

プレスクール、図書館、大人のスクール、(建物は掘っ立て小屋でも)、劇

私の主な働き:

資金面で継続的にサポートしてくれる組織が必要なため、プロポーサルづくり、ドキュメント作成、広報。ドラマ撮影、紙芝居作成、お互いにパートナーシップを結び、協同活動。助け合う。

B. サポート

Pre-school プレスクール

幼稚園には午前中にしかいけない。午後は畑仕事。

教師はボランティアで、持続難しい。ティーチャー・トレーニング

NGO はその後のアフターケアは無い。建物をいくつ建てたか。数値を意識していただけ。NGO のあり方を考えさせられた。

私の働き: 指導スキルの教え合い。ディスカッション、ミーティング。

Orphan support group

元孤児による学費に当てるための、家具作成、作物栽培。

私の主な働き: メンバーの意識・やる気向上。材料調達のためのパートナーシップのサポート。

Cloth Distribution to Orphans as Christmas Gift

クリスマスに洋服を配る活動。服が無くて、学校に通えない子供たち。両親が居ない子供が対象。でも母親だけの子供も大変。

私の主な働き:

洋服調達のためのパートナーシップ、各村の役員会とのやりとり(リスト作成、調整)、当日の運営、配布

Chirdzulu 地域における HIV/AIDS 状況

人口: 480,000 人 21.4%が感染

15-49 歳の人口: 140,000 人

15-49 歳の感染者数: 30,000 人

急速に広がっている。都市に近い。出稼ぎの男性が感染して妻である女性にうつしてしまう。

Positive group (Chikankheni Support Group)

メンバー全てが Positive。女性 17 名 男性 3 名(5つの村から参加)

一週間検査 300 人のうち 50 人が感染している。

活動廃れている。ミーティングもガーデンも行われていない。実質活動停止中。

「やる気を出させないと」

各自の家に行って、調査。学校の先生だけが英語をしゃべれるので、通訳を頼んだ。

食生活、健康状態、感染時期。どう感染したかはタブーなのであまり話したがらない。

栄養と収入が全く足りていない。

(2月頃からやることが見えてきたはこれ!)

にんにくを植える。育てやすい。免疫力アップ、栄養改善。CD4 アカウントが400から600になった人も!

栄養改善のための、家庭菜園(ホームガーデン)。野菜の種の配布(にんじん、トマトなど)

ポケット・マネーを出すのは、サポートとして間違っている。

企業めぐりをして「困っている人が居る」理解を得て、野菜の種を頂いて、支給。

IGA: Income Generating Activity Positive group—Peanut butter—

収入をどうするか、一番の問題。グループ活動によって現金収入手段を得る。

集まる機会を増やし、グループカウンセリング(Sharing)を自然に行う。

私の働き:

ピーナッツ・バターを提案。彼らの内部から出たアイディアではないところが反省。

先生紹介。指導:

道具、製品の管理。

記録管理。ノートをどうやって書いていくか。数字もかけないので。

仕入れ、販売、収入管理、ラベルの貼り方、補填

マーケティング、どこに売りにいくか、どう売るか

市場開拓 新しい客を見つけに。会社レベルで買ってもらえないか。

ピーナッツ・バターは嗜好品なので、貧しい人には売れない。サラリーマンに売る。

なぜピーナッツ・バターなのか？

道具、原料の調達が簡単。うす、きね、落花生を普段食べている。塩も砂糖も唯一の調味料としてある。先生が資材を提供。ローカルで手に入る。

最初は「自分が弱い HIV/AIDS なのに、できるわけがない」という反応だったが、先生によるデモンストレーションを見せて、啓発された様子。

週に2回、火曜日水曜日の午後

薬で元気を保ちながら、作業。

収入で靴を買えるようになった。

NGO のオフィスに売り込みに行ったが、買われなかった。NGO はエリート企業の一つ。お金が高い。サポートしたいという意識の高い人が居るわけではない。

初期の売れ行きは週4、5本であったが、市場開拓で10本以上に。

商品改善で、ナッツが残るピーナッツ・バターから、完璧なペースト状に。

私の仕事、仕事の工夫:

手洗いの訓練、売り込み。リーダーの喪失。エイズのプロジェクトの場合、引継ぎを期待していた人物。リーダーを立ててはいけな。皆エイズ患者なので、いつ居なくなるかが分からない。自分が居た期間中でも、3人が亡くなる。

プロジェクトのノウハウを全員に共有するために、ドキュメント管理 パソコンから、ノートに作り直し。鉛筆とノートで書くという習慣が無く、全部頭にとどめようとする。教育が必要。

2007年7月3日 Chikankheni Support Group のピーナッツ・バター活動が、全国版の新聞で取り上げられた。宣伝に。

(5) まとめ

① 生活からみえてきたもの

- ・ もののない生活

感謝と(もののありすぎる生活への)疑問

工夫

工夫をすれば人間生きていける。

お湯が無ければ、太陽の熱で暖める。

水はバケツいっぱいでも洗える。

自然

ランプの下で書く日記、満天の星を見つめながらの歯磨き、夕日を見ながらのギター

② 活動から見えてきたもの

- ・ 人とのかわり方

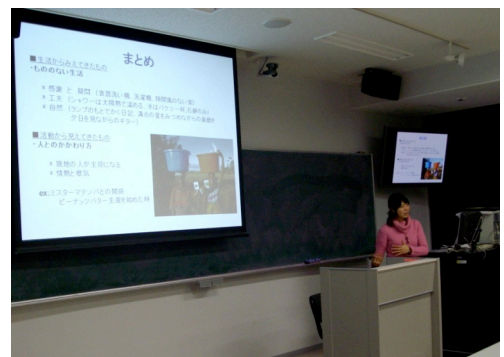
現地の人が主役になる。

関係を結ぶには情熱と根気が必要

ex) ミスター・マテンバ

年配、外国人という意識、地元のリーダー意識 とつつきにくかった。

男性を連れて会いに行くなど工夫をした。



最後は作物を育てて見せに来てくれたり、一番協力してくれた。

現地の状況

マラウィのエイズ問題

医療問題: 薬、病院のアクセス

生活環境: 気温、天候、

お金が無いことで、栄養、量的に不十分な食生活、痛み止めすら

さらに偏見・差別 安全な性行動の意識。「エイズだからモノを売らない」と言われることも

日本の現状

新規 HIV 感染者、AIDS 患者報告数 1358 人(上昇。10 年前は 610 人) マラウィは 1 万人(下降)

学校での性教育なし。メディアによる性情報氾濫。コンドーム高価。血液検査

それに対して、マラウィ

性教育あり。正しいブックレット。コンドームの無料配布。

地域にこだわらず、エイズ問題に取り組んでいきたい。

<質疑応答>

Q. ユースの人たちは、本当に地元の人か？大学出？

A. 地元の人だが、教育は受けている。ただし、コミュニティ・スクール。資金不足で、高校中退。地元の村の人。

Q. 形成されたきっかけは？

A. 自分たちで組織。ノウハウは足りない。

Q. 若者のやる気がキーポイントだが、意識の差はどうして出るのだろうか？

A. 目に見える成果。ユースクラブは規模が小さく、やる気が出にくい。病院まで歩いていったときに、啓発用の歌を唄ったが、やる気のある・ない目に見えて分かる。自分の近くにどれだけ感染者がいるか、どれだけ身近に感じられるかということにもよる。

Q. 外部への交渉には地元の人と一緒にいくのか？

A. NGO には、目星を付けて行く。彼ら(Youth)と行くときは、現地語。その方が効果的。主体的に交渉。そうでないと続かない。今では NGO も買ってくれるようになった。

Q. 薬はどこで？

A. グローバル・ファンドとマラウィの 5 年契約で無料配布。後 1、2 年で切れるので、その後どうなるか？薬は一度飲むと一生飲み続けなければならない。

Q. グループにどうやって入っていけばいいのか？外国人という問題。

A. マラウィでも、外国人＝お金で歓迎。次第にお金くれないとわかるが、あげるだけでないサポートをする。マラウィは入りやすかった。エイズによる偏見を恐れている。2ヶ月とか、一緒に時間を過ごすことで、心を開いてくれた。

Q. エイズは地元でも偏見がある。エイズにかかっていない人は、予防などについてどういう認識なのか？

A. ポジティブがマジョリティになっているので、ある程度の仲間内なら、言える。しかし、偏見やいじめられる子供も。グループ意識もある。予防はコンドームになるが、30 歳代の男性は理解ない。バナナの皮、ガムなどを使っているという間違った理解。教育を受けている年代では、感染を恐れてコンドームを持っていくようになる。

Q. 今後の活動は？

A. 日本では予防・啓発。医療の面では整っているが、ポジティブの人たちがシェアできる場所が無い。マラウィでは毎日ニュースや新聞で取り上げられ、街中にポスター。日本でも、全部やらずに、もう少しフォーカスしたいと思っている。



2. 『豊かさの尺度』

講師： 若尾 健太郎氏

(1) 自己紹介

東京生まれ、育ち

普通に社会人になった。SE。二年間働いて、このままでいいのかなあと感じた。パソコンとしゃべるようになった自分に危機感を覚えた。10年後もこれをやるのかと思うと違うと感じた。

ケータリング・カフェ経営に移った。

バイトしながら、A SEED JAPAN に所属。協力隊に行くには、NGO での活動が経験重視されるので。

自分は何が出来るか。大学の頃国際経済を専攻していたので、活かしたいと思った。

青年海外協力隊。グアテマラ共和国。村落開発普及員。

協力隊写真展「風の通り道」を開催している。

市民活動「東大農場の緑を残す市民の会」スタッフ

「ストリートチルドレン芸術祭」JICA 経由でネットワークが広がった。

(2) A SEED JAPAN について

環境 NGO の草分け的存在。

面白かったのは、ボランティアが主体となって活動。事業部でない。イベントの企画運営からすべて。

ごみゼロナビゲーションをやっていた。ライブイベントなどでのごみ分別。社会問題を意識するきっかけに。

協力隊が決まってからも、活動したいと思ったが、大学生に「協力隊に受かっているなら」と薦められ。



(3) グアテマラの基本情報

ごちゃまぜの国という印象。昔の文化・宗教が残っている。人種もばらばら

美しい自然と多様な文化の共生

広がる格差

内戦のなごり暴力・犯罪 協力隊の同期が巻き込まれ、帰らざるを得なくなった。

みんなが同じ服を着ている。次の年になると色が変わる。紫、緑、赤

バスが崖から転落する事故がしょっちゅうある。

とうもろこしを練って焼いたものが主食。鳥や野菜も食べられる。

(4) 活動内容：

市役所の企画課業務に所属

グループ、女性のエンパワーメントを図る。自分が居なくなった後からも新規で活動できるように。

家庭消費財の作成を通じ、収入向上を図る。

廃油石鹸作成、有機肥料作成、

・ グループ組織アクティビティ

リーダーを立てて、裏方になる。

ビニールハウス作成

農業プロモーターと一緒に指導

NGO はハコもの。情報のみ。管理の仕方が分からないので苗木の全滅が起こるなど。

自分たちが出来ることとして、トマトの技術指導。

薬草化粧水。手あれがひどいので。農作業だけでなく、農薬を手でかき混ぜる。

- ・ 村民グループ活動植林プロジェクト

2005 年 10 月ハリケーンの被害 ミッチはアメリカを通ったから有名だが。土砂崩れ防止のために植林。二次災害を防ぐ。

日本の各機関の協力を得て、14000 本の苗木を被害地域、被害住民に配布。環境教育をして、なぜ植林をするのかについて理解を深める。

- ・ 小学校アクティビティ

最後のほうはメインに。三つの小学校。

国際理解授業、環境教育、教材配布、鉛筆配布(日本のボーリング場つぶれるのであまっているのを調達)、友人の協力を得て。

手あれ対策 子供も畑仕事で。薬用化粧水。

- ・ 市企画課内業務

ホームページ作成 SE の経験を活かして

- ・ 隊員コーディネート

野菜隊員と農民の間をつなぐ。コミュニケーションをサポート。

(5) 活動における問題点

語学力

JICA の案件と配属先のニーズのギャップ

- ・ JICA からの要請内容

炭焼きの指導

鱒養殖の指導

ブロッコリー生産など

- ・ 実際の市役所の要請内容

任地に派遣

三ヶ月間ぼーっとしていた。調査は危険なのでとめられた。

ハリケーンが起こってから、植林プロジェクト、農民グループなど動き出せた。



(6) 活動のヒント

上手くいけばもうけもの、失敗を恐れない。

友達を利用しよう。自分に知識が無かったら、

詰まったら外に出よう

主役は住民と現地機関

好奇心は活動を広げる。疑問をいつも持っていないと活動が繋がらない。

図々しさと謙虚さのバランス。「お前は何をしに来たんだ？」

なんでもいいから喋る、聞く、質問する。

村落開発普及員は、何でも屋さん。

派遣前の経験がモノを言う。SE の経験が役に立った。

常に最悪を想定→ポジティブに転換

(7) 私が思う村落開発普及員とは(ファシリテーション型)

なんでも屋

コミュニケーション能力が問われる

常に広くアンテナを張り、いつでも情報を操れる能力が求められる。

(8) 風の通り道

コンセプト: 写真を通して、協力隊として二年間行ってきて、何を感じて、考えたかを発信する。

(以下、写真紹介)

目が見えない老婆、歌を唄って日銭を稼ぐ。都市は発展。格差。

フィジー。上水道も電気も無い。川に橋はない。増水あり。陸の孤島。水の大切さ。「我々が考えてしまう、不便とは？」発展の急激な格差も現実だが、村の人々の笑顔を見ていると、本当の発展とはなんだろうかと考えてしまう。

ネパール 校庭を作った。朝の集会。

兄弟、姉妹が赤ん坊を育てているのは当たり前。日本からはいつ失われたのか。

老人ホーム

グアテマラ。人間らしい人間が居る。毎日楽しく生きる。昔の日本。
現地ではきれいだと思って撮ったが、日本に帰ってから見てみると・・・
豊さ、人間、家族、自然、文化、宗教、平和。

みんなが言っていることは、「国際協力でいろんな壁にぶつかって、日本はどうかで考えたか？」

自分は右脳派なので、感情に訴える。

自分のルーツや歴史、現状についてよく知り、伝えることが大切。

ハードより、ソフトが重要。

日本で出来る国際協力はたくさんある。

実際に海外に行って何かをやることだけでなく、

環境保護、フェアトレードなどの消費活動(国際問題に直結している)、国内野菜購入、政治参加 NGO/NPO のボランティア、勤務。

まずは知る事から始まる。例) 辺野古の米軍基地拡張防止運動

「自分たちに何が出来るか」と聞いたら、「この状況を知って下さい」と言われた。

「自分に心の余裕があって初めてできるもの」

一人一人の心の余裕から平和な心が生まれ、その波が他人に伝わり、平和や国際協力などの行動につながる。自分の心が平和でないと、誰かを幸せには出来ない。

<質疑応答>

Q. JICA とグアテマラ政府の要請のギャップがあるのはなぜか？

A. JICA は技術協力。グアテマラはマンパワーが欲しい。中身があまり吟味されていない。機関を長くすれば、ギャップもなくなるかもしれないが、調査が足りない。必ずギャップはある。

Q. 派遣は連続して行われたのか？

A. 場合による。後任は派遣終わった人が決める。ボランティアと JICA 次第。

Q. ギャップがあると言うのは、伝わらないのか？

A. 最初にギャップはあるが、行政側を信じちゃダメだと伝えられる。あると分かっていたが、ありすぎて縛られる。

Q. 活動の困難をどのように乗り越えたか？

A. 努力。語学。ホームステイ先でしゃべる。

人付き合い。一番大切。職場のカウンターパートと噛み合わないなど。事を荒立てず輪を広げていく。出来たネットワークを以下に掘り下げるか。

Q. ①個人で組織を動かすのは日本でもむずかしいのにどうやってできたか？②波及ベースは？③協力隊の任期中に旅行行けるのか？

A. ①学校は個人で。他は NGO の協力、やる気の無い同僚のモチベーションを上げるか。ア・シード・ジャパンでの経験を活かした。②後任を呼ばなかったのは、波及効果が見られなかったから。農家同士でなぜうまくいかなかったか、いったかの話し合い設けるべきだった。③普通は平日勤務。缶詰も。休みがある。国内旅行に関しては無い。自費。国外旅行は 20 日間であれば OK。

参加者の感想から：

- プレゼンテーションを聞き、感じたことはプレゼンター二人のプロジェクト企画・進行をする上での理念、やり方の差異でした、例えば斉藤さんは物資の援助を与えないことを徹底し、若尾さんは個人・知人が有するノウハウ・物資提供を利用しているということでした。この二つのボランティアの方法のメリット・デメリットを比較できたら後のボランティアの参考になるのではないかなと思いました。(M1)

- 斉藤さんの話を聞いて

まず長くない期間の中でよくこれほど多くのことをできたなと感心しました。同じ学生ながらすご



いなと感じました。

若尾さんの話を聞いて

JOCV の現場での様子が伝わってきました。初めは何もできなかったことなど包み隠さず話していただいたのが良かったです。(M1)

- 貴重なお話ありがとうございました！大変興味深かったです。
えりかさん
すごい内容の濃さでした！さらっと話しているけど、すごいドラマの連続だったんだと想像します。本当にお疲れ様です。そしてこれからがまた始まりなんですね。日本とマラウイの共通問題になりつつあるエイズ、私も日本で何が出来るかを考えて生活していきたいです。
若尾さん
お話と写真、とても楽しませていただきました。薬草化粧水、私も欲しいです(笑)。
二年間、協力隊として行くというのは、自分が何者であるか、何が出来るかを体当たりで試しに行く厳しい作業なのかと感じました。その中で活動を模索して、自分だけのネットワークを足跡に残していくそこも魅力なのかと思いました。(M2)
- エリカさんへ
大変面白いプレゼンだと思います。短い期間にこんなに充実した活動ができて、本当に素晴らしいものです。また、マラウイの経験を活かして、これからの活動につなげてください。
若尾さんへ
最初の「ぼへ〜」とした期間があると聞いた瞬間、やっぱ協力活動も簡単にすぐできるものでないと感じました。長い期間の活動を如何に高い効果を上げるのに、自らの努力が欠かせないと改めて認識できたと思います。(M1)
- えりかさん
ピーナッツバターのエピソード面白かったです。無理なく、長続き出来そうで、収入も見込める、小さいながらも、このような行為の積み重ねが、地域の活性化が収入の確保につながっていくのかと思います。
若尾さん
写真紹介の中で、「貧しさの中にも」という前置きがよくあったのですが、まずこの地域は貧しい(おそらくは金銭的に)と捉えてしまうことは、自分も含め日本人としての眼鏡を通して見てしまっているのかと思いました。(M2)
- 熱い方々で私も熱くなれた気がします。豊かさとか幸せとか生きる意味とかそういった根本的だけども答えのないようなものが大事なんだなあ。でも答えもないでしょう。自分がいなくなってもずっと循環していくシステムを作ることができるといいですね。(学部4年)
- お二人とも非常に刺激のある、現場の雰囲気が伝わってくる話をしていただき、とてもおもしろかったです。特に同年代の若い方たちが現場で働いている様子を知るの、今大学という場所で理論を学んでいる自分にとっては、自分だったら何ができるのか、どうするのか、今何をすべきなのか等のことを考えるのに役に立ちました。
マラウイの話では、エイズで亡くなる方が多いため、リーダー一人を作ることができないということがショッキングでしたが、現場から得られた重要な観察であると思いました。ピーナッツバターの話もやっぱり中間技術が必要なんだと思いました。プレゼンの仕方がとても良くて(お話が上手で)終始興味を持って聞かせていただきました。ありがとうございました。
グアテマラの話は、環境が全く違う中に放り込まれて環境に適応するだけで、自分の生活をするだけで大変かと思われる中で地域の人の役に立つ活動をしなければいけないというのはとても大変だと思いますが、それをやっていっちゃることが本当にすごいと思いました。写真展は企画としてとても面白いと思いました。単純に見てもとてもきれいな写真が多くて、楽しませていただきました。さらにそれに協力隊のメンバーの方々のメッセージが加わることで、さらに味が出ているな、と思いました。(M1)

